



道選手権大会ダブルス準優勝の川上(左)・佐々木主将組

帯大谷高男子(相澤俊彰監督)が道内外の大会で好成績を収めている。全日本ジュニア選手権出場選手選考会北北海道ブロック(8月7、8日・帯広大谷高校)で竹村怜斗・木村友翔組(1年)がダブルスで優勝、シングルスは小川颯菜(2年)が制し、全国大会(9月20~23日・岩手県)に出場した。道私立高校大会(6月17~19日・札幌)は男子団体戦で準優勝し、全国大会(8月27~30日・神奈川県)で出場48校中14位と健闘した。道選手権大会(8月15~18日・伊達市)はダブルスが同校対決となり竹村・木村組が優勝、川上諱道・佐々木一成主将(2年)組が準優勝。優勝ペアの竹村・木村組は来年1月の全国高体連合宿、道協会主催の台湾遠征に参加する。3年生引退後も好成績を残し、佐々木主将は「1年生も十分な力があり、団体戦ではみんなやる時はやる。去年と比べて強いチームになるよう頑張りたい」と意気込んでいる。(松崎篤嗣)



全日本ジュニア選手権出場選手選考会北北海道ブロックで優勝、全国に出場した(左から)竹村・木村組と小川

川上・佐々木組  
道選手権  
準優勝

# 小川、竹村・木村が全日本 帯大谷男子快進撃

団体戦でも道私立高校大会準優勝、全国大会14位など好成績を収めている帯大谷高男子バドミントン部



## 前チームを超える強さ目標に

## 団体戦 道私学 準V

### 練習が実結ぶ

小川

○:全日本ジュニア出場選手選考会北北海道ブロックのシングルスで優勝した小川颯菜は「上から落とす球と早いタイミングで後ろにある球の使い分けがよ

くできていた」と話した。練習が実を結んでよかった。決勝は旭川実の阿部泰士(1年)と当たったが、21-13、21-4と大差をつけて勝利した。全国大会では2回戦で敗れたが、高体連以降、シャトルが高い状態で素早く触れることを意識して練習するようになったといい、「練習

### 安定した試合を

竹村・木村組

○:1年生の竹村怜斗・木村友翔組が、全日本ジュニア出場選手選考会と道選手権大会を制した。2人がペアを結成したのは全十勝

高体連(5月)からだ、2人は「めっちゃ気が合う」と声をそろえる。

池田町出身の木村が後衛、日高管内日高町出身の竹村が前衛を務める同ペアは、木村がチャンスメーカーしながら竹村が決めるスタイル。選考会ではペア結成後に初の北北海道を制し、さらに道選手権では札幌龍谷勢など南北北海道のペアも次々に撃破して全道の頂点に立った。竹村は「北北海道ブロックだけでなく、全道で一番を証明できたのが素直にうれしい」と話した。

全日本ジュニアでは初戦でファイナルまでもつれこんだものの敗退。今後の課題について木村は「サーブで相手のチャンスボールになつてしまうことがあるのでしっかりと入れて、レシーブやアタック力も強化したい」、竹村は「前衛で決め切れない場面があると厳しいので、しっかりとラケットを振って決められるようにしたい。1回戦から緊張感を持って安定した試合づくりをしたい」と話していた。

### スタイル確立を

川上・佐々木組

○:2年生の川上諱道・佐々木一成組は道選手権大会決勝での同校対決に破れはしたが、川上はけがから復帰後の全道大会で十分な成績だった。佐々木は8月のインターハイに田部時生(3年)とペアを組み出場した実力者。3年生の引退後は新主将として部をけん引している。

川上は「復帰から1カ月たつて、やっとダブルスの前衛(のプレー)が分かってきた。どっちも後衛はできるけど、前衛に入ることが自分の方が多い。低い球を押さえて守備範囲を広くしたい」と話した。佐々木は「これからどんどん探っていくって、2人のスタイルを新たに確立していきたい」と向上を目指す。

相澤俊彰監督は「3年生が抜けてもそんなに大きく変わった感じはしない。逆に言うとう物足りない。自分たちの代だという『がっつき』が足りていない感じもある。佐々木にもっと引っ張ってもらって元気な方向に向かってもらえたら」と期待している。